今月の本

『サーカスは私の〈大学〉だった』
大島幹雄著

ロシア語を学んだのがボリショイ・サーカスとつながり、気がつくとサーカスの世界に足を踏み入れて30年。何が自分を、これほどまでにしっかり結びつけたのか。

たいていの人には幼いころの淡い記憶があるだけだろう。日本のサーカスとはまるでちがった芸とショーの世界が、多くの私的エピソードをまじえて紹介される。「このサーカスを見て、いかに幸せになれたか」。そこなのだ、サーカスは人がそこにいるだけで幸せになれる異空間、異次元の世界なのだ。だからこそ魔法のような曲芸、手品、からくりが用意されていて、芸とワザの鍛錬があり、お客を手玉にとる赤鼻クラウンがいる。心ならずもそこに入れこんだばかりに、人生を棒に振った男もいた。さらに政治や歴史に翻弄された人々のこと。文化史では永遠のまま子であるサーカスの世界へのあふれるような愛情が、沁みるようにつたわってくる。1,890円（こぶし書房）